

有吉佐和子

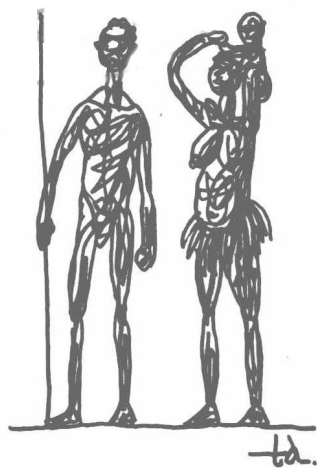
女二人の ニューギニア



朝日新聞社

タリケルニエール

有吉佐和子著



朝日新聞社

さしえ 装幀 宮田武彦
地図 吉沢家久

女二人のニューギニア 定価 800 円

著 者 有 吉 佐 和 子
発行日 昭和44年1月30日第1刷
昭和54年10月30日第20刷
発行者 朝日新聞社 藤田雄三
印刷所 図書印刷
発行所 朝日新聞社 東京 名古屋
大阪 北九州

©有吉佐和子 1969年

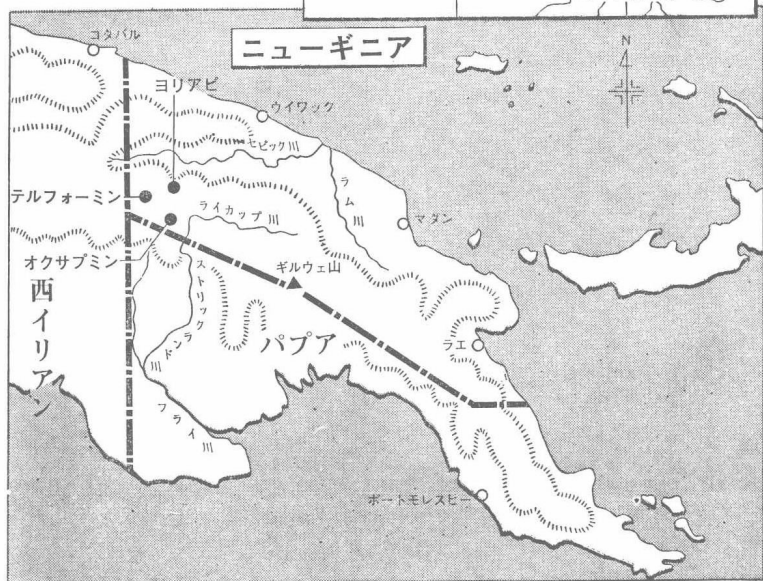
G093 - 253669 - 0042



フィアウを中心に(左)畑中幸子さん、(右)筆者。



女二人のニューギニア





畑中御殿 向って左側の突出し窓の部分就是我的寢室で、右の窓の一室が畑中さんの寢室になっている。



シシミンの家 建ったばかりで、滅多に、人が住んでいなかった。向って右の入口が女の入口、左が男専用。中へ入れば、丸太で仕切りがしてあるだけだ。



- 上 パトロール中のポリスと、集ってきたシシミン族。
- 左上 首飾りの白いのは、小さな貝で、遠い海岸からバーターで渡り渡った高価(?)なものである。
- 左下 マシュウ夫妻とその子供 マシュウ夫人のラブラブ(衣類)は、オクサブミンとのバーターらしかった。

私がニューギニアへ行くと言いだしたとき、そんな無謀なこととはよせ、お前には無理だと言つて止めてくれるひとが一人もいなかったのは何故だったのだろう。私は身長一六四センチもあつて図体が大きく、一見丈夫そうに見えるけれども、その実はウドの大木で、体力は人並以下、わけても脚力のなさといったら、世の人が血道をあげるゴルフでさえ歩くのが辛いのでやめてしまつたくらいなのだ。動作が鈍いので悠揚せまらない女だという誤解をしている人々がいるが、本当は虫一匹這い出しても悲鳴をあげて逃げるような弱虫なのだ。そういうことを身近にいる友人たちは、みんな知っていた筈なのに、どうしてあの人たちは誰も、私のニューギニア行をやめろと言つてくれなかったのか。

ヨリアビに着いてから数日、私は痛む^{からだ}軀を畑中さんの家のでこぼした床に伸ばして、ずっと未練がましく、こんなことばかり考えていた。

家の中に寝転んでいても、オム川の激流の音は聞こえてくるし、窓から（その家は要するにはんの小さな囲いがあるだけで、その囲いもスノコのように隙間だらけだから、どこもかも窓だったといえるのだが）見えるのは、緑濃^{きよ}い山脈である。ヨリアビというところは、密林で掩われた

山々で十重二十重に取り囲まれたところなのだった。ああ、あの山々を私は私のこの足で歩いて越えてきたのかと、しばらく私は自分でも信じられなかった。

しかしいつまでもものんびりと寝てはいられなかった。足の爪が、親指の爪が色を変えてバクバクにはがれかかっていたし、得体の知れない虫が襲いかかってきて、そのあとの痒さといったらない。ポリポリと掻き、ああ痒いと心の中で悲鳴をあげ、夢中で掻いていると、すぐ耳許で、

「フィナーニ・ロイヤーネ」

と優雅な声が聞こえる。

「シシミンが、あんたに挨拶に来たわよ、起きなさい」

畑中さんが活を入れるように大声で言うので、私はよいしょよいしょと節々の痛む軀を起して立上り、びっこをひきながら戸口へ出て行った。

鼻の先に三つ穴をあけ、そこから鸚鵡オウシの黒い爪を一本ずつ突き出している背の高い男が私の方に長い手を差し出している。

「シシミンの首長よ。フィアウという名アよ。あんたもフィナーニと言いなさい」

畑中さんの言うとおり、フィナーニと言うと、フィアウは馬のように大きな口をひろげてまたフィナーニ・ロイヤーネと繰返した。彼の背後には、豚の牙を鼻にさした男や、片方の耳に竜の落し子に似た虫のくるりと巻いたのを吊下げているのや、鸚鵡のトサカを小鼻の穴に通し、眼と

眼の間で十文字にぶつ違えているなど、さまざまのシンミンがいた。みんな片手に弓矢を握んでいる。ああ私は、つまりこういうところへ来てしまったのかと私は改めて溜息が出た。

フィアウが、ぐいと私の手を握りしめた。親愛の情を私も示すために握り返そうとして彼を見上げた私は、もう少しで後へ飛び退くところだった。彼だけが頭にオーストラリア陸軍の制帽を冠っていた。それはつば広で片端をピンと折り上げたなかなか伊達な帽子だったのだが、ひどく



古いものらしく縁はぼろぼろになっていた。きたないのである。しかし私が驚いたのは、そんなことではない。彼の首の下から、胸、肩、二の腕の逞しく盛上った筋肉を掩っている黒い肌が、指の先まで細かく亀裂がはいり、それぞれ小さく渦巻いている。

「ひ、皮膚病なのかしら、このひと」
私は手を放してから、おそるおそる畑中さんに訊いた。

「これがシック・プクプクというて鱧皮みたいになる皮膚病なのよ。プクプクというのは鱧のことや」

「ああ」

「このおっさんは、その他に象皮病も持ってるで」

「どこに」

「そこんこや。その草の下あたり」

フィアウは、緑色の草の束を前にぶら下げていた。帽子とその草を除けば、彼は全裸だったのである。そしてひきしまった腿の付け根には象の皮のようなものが、大きくかたまつて、ぶくぶくと腫れ上っていた。ぞっとしながらも、そこは私だって作家だから他の男たちはどうなっているのだろうかと、さりげなく見まわしたところが、男たちは誰もパンツをはいていない。草を下げているのはフィアウだけで、他の連中は股のところに小さな筒のような木の実のような黄茶色のものを一本ぶらさげている。畑中さんの説明によれば瓢箪ひょうたんの一種だということであった。

これはまあ本当に、大変なところに来てしまったものだ、と私はまた溜息が出てきた。

「このフィアウは二年ほど前の戦闘で二十八人のドラムミンを射殺した男よ。あまり賢くはないけど、ものすごく強いらしい。駄つき見てごらん。いい線やろ」

しかし私は彼の男性美を鑑賞する余裕はなく、彼がごく最近、二十八人もの人間を殺したとい

う一言に釘づけにされていた。

「こ、このひと、人殺し？」

「うん。数の中には女子供は入れてへん。女子供の方は、ナタで叩き殺したらしいわ」

「そんな殺しあいが始終あるの？」

「うん、種族間のトラブルはようあるらしい。まだ私は詳しく調べあげてないけども」

「私たちは大丈夫なのかしら」

「そら分らへんで。ずっと前にシシミンから野豚一匹物々交換したんやけど私一人では食べられへんので足一本残してみんなにやってもうたら、それから二カ月して一人死んだんやて。それが私のスピリットのせいやということになってあるんや。二カ月前に食べた豚でやで。むちゃくちゃやる。そやからね、いつ石矢が飛んでくるか分かりませんよ」

私が蒼くなってきたのを見て、畑中さんは豪快な笑い声をあげた。畑中さんは私と較べるまでもなく小柄な女性なのだが、声だけは大層大きいのである。

「大丈夫やて。ポリスが二人、ライフル持って付いているやないの。安心してなさい」

ニューギニア人のポリスは、制服制帽を着用してビジン英語を話すけれども、彼らの顔もよく見ると、眼の縁に入れ墨がしてあったり、鼻の先に穴があって、この間まで骨をさしていたという痕^{あと}が歴然としている。しかも彼らは弓矢でなくライフルを持っているのだ。畑中さんがいくら

大丈夫だと言っても、私は大丈夫だと思えなかったし、安心しろと言われても私は安心できなかった。

しかしヨリアピというところは飛行機は決して着陸できない谷隙にあり、ニューギニアでは万金を積んでもヘリコプターは呼ぶことができない。外界との連絡は、私が三日間死にも狂いで歩いたあの五つの山を越えて、オクサプミンというパトロール事務所へ出る以外には方法がない。私はほんの一週間ほどでオクサプミンに戻るつもりで出かけてきたのだが、足の爪ははがれているし、今の状態では、またあの山を越えることなど気力体力ともにとて出来ないことではなかった。

このシシミン族と共に、これから私は暮すというのか。

私が最初持っていた好奇心などはけしとんでしまっていた。私は帰りたかった。一日も早く、こんなオッカナイところから逃げ出したかった。しかし帰るには、私の目の前に立ちはだかっていいるジャングルでおおわれた五つの山々を、よじ登り、すべり落ち、這いまわりながら泥だらけになって、毒キノコに喰いつかれたり、山蛭に吸いつかれたりしながら越えなければならないのである。

もう当分は帰れない……。

このままシシミンの餌食になってしまうのではないかと、私は慄然としていた。子供のことが、

しきりと思い出された。未婚の畑中さんとはかく、ニューギニアというところは子持ちの女
来るところではなかった。畑中さんには悪いけれど、このときの私の正直な気持ちでいえば、こ
こは人間の来るべきところではないと思われた。なんとという馬鹿だったろう、私は。こんな凄
いところへ、私は実に、なにげなく出かけてしまったのだったから。私は東京にいる友だちの誰彼の
顔を思い浮かべ、あの人たちはどうして私を引止めなかったのか。中にはジャーナリストも何人
かいたのに、あの人たちは、「へえ、ニューギニアへ？」そいつはいいなあ」とか、「凄いですね、
羨しいなあ」とか、そんな無責任なことしか言わなかった。

つまり、あの人たちは、ニューギニアについて、まるきり無知で認識不足だったのだ。なんと
いう頼りにならない連中だろう。私は心の中で、彼らに当り散らしていた。

見渡せば、ヨリアビは文字通り大自然の中に埋もれていた。目の前にそそり立つ山々は緑とい
う一つの文字では足りないほど、さまざまの緑におおわれていて、どの木も見覚えのないものば
かり。川の流れは急で、水の色は泥色、バケツで汲みあげても泥は沈まない。そして暑い。しか
し短い日照時間が過ぎると急激に冷える。夜、石油ランプをつければ、見たこともない無気味な
虫の大群が襲いかかってくる。ああ、大変なことになってしまった。私はこれからどういうこと
になるのだろう。

心細さに、そっと畑中さんの顔を見上げると、彼女はにっこりと笑って言ったものだ。

「あんた、よう来てくれたわ。居たいだけ、ゆっくりしてたらええわ。簡単には帰れんところがニューギニアよ」

そもその発端から書いておかねばならない。わが畏友、畑中幸子さんは東京大学大学院文化人類学教室に籍をおく一学究である。著書に「南太平洋の環礁にて」（岩波新書）があり、それは彼女の最初のフィールドワークであったポリネシアについて書かれたものである。私とは十数年前、どちらも学生だった頃からの知りあいで、書いて言えば同郷だが、私は紀北、彼女は紀南の出身で、和歌山県民としての共通点はあまりない。畑中さんはポリネシアの次のフィールドワークとしてニューギニアの未開社会を選び、一年をウエストハイランドで過ごしてから昨年（一九六七年）八月まで帰国していた。学位論文を書くのが目的で、そのあと前記の著書も書き上げてから、再びニューギニアへ出かけて行ったのである。

その直前、何年ぶりかで私が出会ったとき、畑中さんは論文を書くのに精力を使い果たしたという姿でふらふらになっていた。

「東京は騒がしゅうてかなわん。私はもう疲れてしもうた。早うニューギニアへ帰りたい。ニューギニアは、ほんまにええところやで、有吉さん。私は好きやなあ」

「そう。そんなにニューギニアがいいところ？」